

田坂広志の風を語る

TOPIC

古く懐かしいものが 新たな価値を伴って復活する

未来を「予見」する 方法とは？

灰塚 これまで3回にわたり、資本主義論、女性論、日本文化論と、連載インタビューをしてきましたが、毎回、田坂先生から、これから世界や社会が、どう変わっていくのか、これから時代が、どこに向かっていくのか、その予見と洞察を聴かせていただきました。

先生は、『これから知識社会で何が起こるのか』など、多くの著作でも、未来のビジョンを語られています、そもそも田坂先生は、どのようにして、未来を予見し、洞察されているのでしょうか？

田坂 大切な質問ですね。その方法は幾つかありますが、それらの中で最も大切なものを挙げるならば、何よりも、「哲学を学ぶ」ことですね。灰塚 「哲学」ですか……。

田坂 そうです。なぜなら、人類三千年の歴史の中で、この世界の変化や発展、進歩や進化がいかなる形で起こるかにについてその「法則」を語った哲学が、幾つかあるからです。

灰塚 例えば、どのような哲学が？
田坂 筆頭に挙げられるのは、ヘー

ゲルの「弁証法」ですね。

灰塚 ヘーゲルというのは、あのドイツ観念論哲学のゲオルク・ヘーゲルですね？

田坂 そうです。そして、彼の語った「弁証法」の中で、未来を予見するために最も役に立つのが、「事物の螺旋的発展の法則」と呼ばれるものです。

「螺旋的発展の法則」とは？

灰塚 それは、わかりやすく言えば、どのような法則なのでしょう？

田坂 例えば、螺旋階段を登っていく人を想像してみてください。この人を横から見ていると、上に登っている。すなわち、進歩、発展しているように見えます。しかし、この人を見ていると、一周回って、元の位置に戻っていると、すなわち、古いものの復活や復古が起こるように見えます。世界は、そのようにして変化、発展するという法則、それが「螺旋的発展の法則」です。

灰塚 すなわち、「古いものが復活してくる」という法則ですね。
田坂 ええ、そうです。しかし、これは「螺旋階段」ですので、元に戻ったように見えて、必ず一段、高い位

置に登っています。すなわち、この法則をわかりやすく言えば、「古く懐かしいものが、新たな価値を伴って復活してくる」という法則です。

灰塚 その法則を示す事例は？

田坂 その事例は、枚挙に暇がないほどです。特に、インターネットの世界は、その実例に溢れています。灰塚 溢れている……。例えば？

古く懐かしいものが 復活してくる

田坂 例えば、インターネット革命によって世の中に広がったビジネスモデルに「オークション」や「逆オークション」がありますね。

灰塚 ええ。ネットオークションは、不要なものを売りに出すときなど、とても便利です。逆オークションも、自分の希望する価格で購入できますので、便利です。

田坂 たしかに便利なビジネスモデルですが、実は、これらは決して新しいものではなく、古く懐かしいものです。これらは、昔の市場などでは、「競り」や「指値」という形で行われていたものです。それが、資本主義の発達の中で「非効率的な方式」とされ、姿を潜めていたのですが、

田坂広志

Hiroshi Tasaka

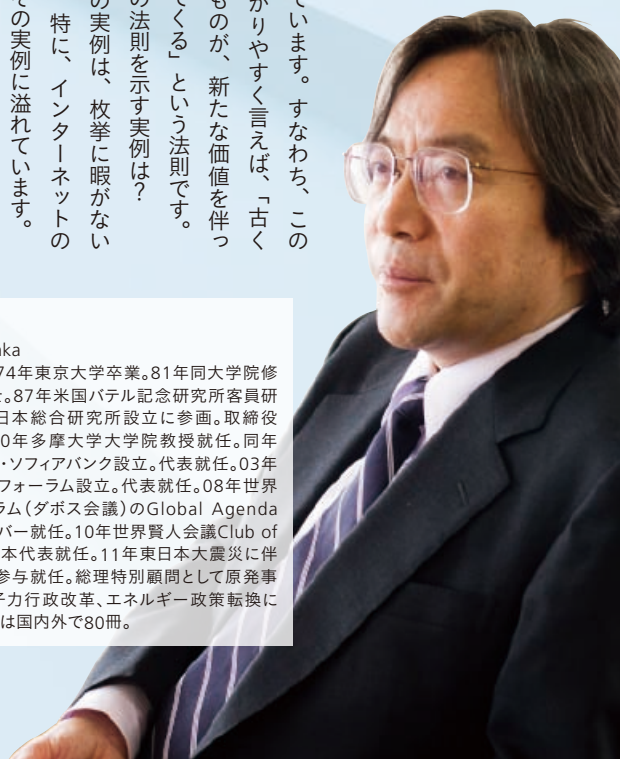
1951年生。74年東京大学卒業。81年同大学院修了。工学博士。87年米国バテル記念研究所客員研究員。90年日本総合研究所設立に参画。取締役等を歴任。00年多摩大学大学院教授就任。同年シンクタンク・ソフィアバンク設立。代表就任。03年社会起業家フォーラム設立。代表就任。08年世界経済フォーラム（ダボス会議）のGlobal Agenda Councilメンバー就任。10年世界賢人会議Club of Budapest日本代表就任。11年東日本大震災に伴い内閣官房参与就任。総理特別顧問として原発事故対策、原子力行政改革、エネルギー政策転換に携わる。著書は国内外で80冊。

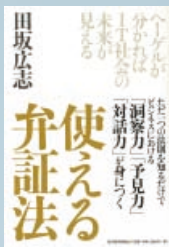
このネット革命によって復活してきたのです。ただし、かつての「競り」は、せいぜい数百人相手にしかできなかった。それが、ネットオークションでは、数百万人相手でもできるのです。その意味で、螺旋階段を一段登り、新たな価値を伴って復活してきたのです。

事例に溢れる インターネットの世界

灰塚 なるほど。それ以外の事例は？

田坂 一番身近な事例は、eメールでしょう。いまは、誰もが当たり前のようにメールを使って「文字を書くこと」によるコミュニケーションを





『使える弁証法』
(東洋経済新報社刊)

「ヘーゲルの弁証法」は、現実の問題に活用でき、日々の仕事の役に立つが、その中でも、最も未来予見に役立つ「螺旋的発展の法則」を解説し、IT社会の未来をテーマに、その使い方を簡明に語った1冊。



『未来を予見する
「5つの法則」』
(光文社刊)

「弁証法的思考」(Dialectic Thinking)を用いて、どのような未来が予見できるか？ これから人類社会に起こる様々な「パラダイム転換」について歴史的なスケールで語った1冊。

RECOMMENDED BOOKS

田坂氏は、これまでいくつかの著作で「未来予見の技法」について語ってきたが、その中から、「弁証法」をわかりやすく解説した2冊を紹介。

行っていますが、eメールの出現以前は、電話を使った「言葉を話すこと」によるコミュニケーションが主流でした。しかし、その電話が普及する前は、手紙や葉書が主流であり、「文字を書くこと」によるコミュニケーションが主流でした。その意味で、メールとは、古く懐かしいコミュニケーション文化の新たな価値を伴った復活でもあるのです。

灰塚 この場合、新たな価値とは？

田坂 メールは、手紙や葉書と異なり、地球の裏側にでも瞬時に送ることができる、何千人にも同時に送ることができる、コストがかからない、転送や共有が容易であるなど、様々な便利さが付け加わっています。

メール以外にも、例えば、eラーニングは、単なる「遠隔教育」ではなく、工業社会における「集団教育」が普及する前の「個別学習」の復活です。かつての日本では、各人の能力や興味、生活の都合に合わせた学習方法があった。「寺子屋」がそうですね。同様に、欧米では、かつては「家庭教師」という方式で「個別学習」が行われていました。

リサイクルも螺旋的に発展

灰塚 なるほど、ネットの世界では様々な形で、螺旋的発展の法則が起きていることはわかりましたが、ネットの世界以外では、その法則が起きているのでしょうか？

田坂 起っています。例えば、「リサイクル」の文化がそうですね。かつて、社会全体が貧しく、資源が乏しかった時代には、廃品を回収して再利用するという文化は当たり前のようにありました。それが、その後の資本主義の発展の中で、社会も豊かになり、大量生産、大量消費、大量廃棄が当然になってしまいました。しかし、地球環境問題の深刻化を契機として、資源を大切にし、リサイクルをする文化が復活してきたわけです。そして、新たな時代のリサイクルは、技術も、制度も、社会の意識も、かつての時代のリサイクルとは比べものにならないほど、洗練され、成熟してきているのです。

生産者と消費者の区別が無くなる

灰塚 その螺旋的発展は、「経済」の世界だけなのでしょうか？

田坂 いや、「政治」の世界でも、螺旋的発展が起きている。例えば、ネットを通じて、自治体の運営に意見を述べたり、行政の意思決定に参加したりする「デジタル・デモクラシー」と呼ばれるものは、ある意味で昔の「直接民主主義」の復活です。

灰塚 それは、現在の代議制などの「間接民主主義」が普及する前の制度ですね。かつてのギリシアなどで行われていた市民参加の民主主義の方式が、これから復活してくると？

田坂 そうですね。ただ、「民主主義」とは、実は「政治」の世界の話だけではないのです。

灰塚 その意味は？

田坂 例えば、「経済」の世界も、現在のシステムは、ある意味で「間接民主主義」なのです。すなわち、「生産者」と「消費者」という言葉に象徴されるように、消費者が欲しいと思う商品やサービスを生産者が生産して市場に提供するという「分業」が、現在の資本主義の市場経済の大前提になっているのです。

しかし、資本主義や市場経済が発達する以前は、「自給自足」という言葉があったように、人々は、自分が欲しいと思うものを、自分自身で生産して、自ら消費していたのです。すなわち、「生産」という行為を誰かに「代理」してもらったのではなく、自らが直接参加して行っていたのです。

従って、これから「経済システム」もまた、現在の「間接民主主義」的な方式だけでなく、「直接民主主義」的な方式が復活してくるでしょう。

『プロシューマ』という未来像

灰塚 それが、田坂先生が「予見」される未来ですね？

田坂 いや、こうした未来は、かつて、未来学者アルビン・トフラーも、1980年に上

梓した著書『第三の波』の中で、「プロシューマ」という言葉を使って予見しています。

灰塚 それは、「プロデューサー」(生産者)と「コンシューマー」(消費者)を組み合わせた造語ですね？

田坂 そうです。すなわち、これからの社会においては、生産プロセスに、直接参加する消費者が増えていることを、トフラーも予見していたのです。

灰塚 そして、そうした未来を「予見」する一つの方法として、田坂先生は、「弁証法」の「螺旋的発展の法則」などを活用されているのですね。この方法は、色々と役に立ちそうなので、今後、活用していきたいと思っています。

有り難うございました。

インタビュー 灰塚 鮎子

Ayuko Haituka

経営者。株式会社新潮社、雑誌編集を経て、株式会社Elephant設立。心に注目した多様性社会におけるマネジメント手法HARDIAL(ハーディアル)を展開。また著述家としての一面も持ち、自身の哲学および四季折々の自然や心の有り様を、抒情的に現した詩を執筆。また目に見えない心の重要性や心を感じるコミュニケーションをテーマとしたコラムを担当。西日本新聞夕刊「わたし活性化計画」、WEBサイトFan Fun FUKUOKA「somethingspecial」に連載中。